

モンテーニュとコルネリウス・アグリッパ

『学芸の不確実性と空しさについて』をめぐって

久保田 剛史

はじめに

コルネリウス・アグリッパ（本名ハインリッヒ・コルネリウス・アグリッパ・フォン・ネットスハイム）がモンテーニュに与えた影響については、今日までほとんど考察の対象とされてこなかった。ピエール・ヴィレーの出典研究によると、『エッセ』にはアグリッパの『学芸の不確実性と空しさについて』からの借用が見られるものの、アグリッパはモンテーニュが愛読する作家とされていない¹。また、ヴィレーとともにモンテーニュ研究における権威的存在とされてきたフーゴー・フリードリッヒも、「モンテーニュがアグリッパにどれほど負っているかは疑わしい²」と述べている。さらに、今世紀初頭に刊行された『モンテーニュ辞典』にいたっては、アグリッパに関する項目さえ設けていないありさまである³。

たしかに、セネカやプルタルコス、あるいはプラトンといった古代作家に比べるならば、アグリッパがモンテーニュに与えたインパクトは瞭然としていない。アグリッパからの借用は、つねに『エッセ』においてフランス語で記されているため、これらがモンテーニュ自身の発言なのか、それともアグリッパの言葉なのかは、一見したところ見分けがつかない。とはいえ、アグリッパからの借用は、モンテーニュが宗教や道徳、その他の学問について論じるさいにしばしば差し挟まれており、いわばモンテーニュの宗教思想や学問観における礎石のような役割を果たしている。本稿では、『エッセ』における『学芸の不確実性と空しさについて』からの借用はもちろん、両作品に見られる類似点も検証しながら、アグリッパがモンテーニュに与えた影響について考察してみたい。

¹ Pierre Villey, *Les Sources et l'évolution des « Essais » de Montaigne*, t. I, Paris, Hachette, 1933, p. 61-62.

² Hugo Friedrich, *Montaigne*, traduction de Robert Rovini, Paris, Gallimard, 1968, p. 61.

³ Cf. Philippe Desan (sous la dir. de), *Dictionnaire Montaigne*, Paris, Honoré Champion, 2004 (rééd. 2007).

『学芸の不確実性と空しさについて』の概要と受容

まずは作品の概要について紹介したい。アグリッパが 1530 年に発表した『学芸の不確実性と空しさについて、および神の御言の卓越性についての演説』（以下、『学芸の不確実性』と略記）は、全 102 章からなる論争的な思想書である⁴。このタイトルに含まれる「学芸」、すなわち *artes* と *scientiae* という語は、たんなる学問と技術を意味するだけでなく、人類の知的活動によって生じた諸々の知識や通説、および人間の社会生活にかかわる諸々の技能を指す。この作品は、人間が作り上げた知識の無益さを攻撃すべく、さまざまな分野にわたる学芸を標的としている点で、百科全書的な性質をそなえている⁵。

『学芸の不確実性』では、導入部（第 1 章）において学問一般に対する敵意が表明されたのちに、自由七科と称される諸学問（第 2 章～第 48 章）が論じられ、さまざまな学説の誤りが指摘される。これに続くかたちで、哲学（第 49 章～第 54 章）の議論が取り上げられ、哲学者たちがあらゆる見解において対立しあい、いかなる真理も見いださないことが咎められる。こうした見解の対立は、人間の社会的営みや日常生活にかかわる学問においても見いだされる。すなわち、政治学（第 55 章～第 65 章）、経済学（第 66 章～第 81 章）、医学および薬学（第 82 章～第 90 章）、法学（第 91 章～第 96 章）である。これらの学問は、自由七科や哲学よりも実践的であるがゆえに有益と見なされているものの、いずれも虚偽の教えをまき散らしているだけであり、アグリッパによれば、人間生活における不幸と災いの原因にすぎないのだ。作品の後半部分では、学問の空しさを示す最たる例として、神学（第 97 章～第 99 章）が論じられ、神学者たちの無知と詭弁がことごとく断罪される。そして結論部（第 100 章～102 章）において、唯一確実な真理および幸福の源泉である神への服従を促すべく、いっさいの学問的知識の放棄と信仰の擁護が主張される。

⁴ Henricus Cornelius Agrippa, *De incertitudine et vanitate scientiarum atque artium atque excellentia Verbi Dei declamatio*, Anvers, Joannes Grapheus, 1530. ただし本稿ではフランス語訳（1582 年版）を引用する。

⁵ 『学芸の不確実性』については、以下の研究を参照のこと。Roland Crahay, « Un manifeste religieux d'anticulture : le "De incertitudine et vanitate scientiarum et artium" de Corneille Agrippa », *Acta Conventus Neo-Latini Turonensis* (Tours, 1976), vol. 2, Jean-Claude Margolin (éd.), Paris, Vrin, 1980, p. 889-924 ; Marc van der Poel, *Cornelius Agrippa, the humanist theologian and his declamations*, Leiden, Brill, 1997 ; Charles Nauert, *Agrippa et la crise de la pensée à la Renaissance*, traduit de l'anglais par Véronique Liard, Paris, Dervy, 2001.

以上のような構成からして、この作品には二つの特徴が指摘できる。まずは、伝統的な知のあり方に対する強い反発である。中世・ルネサンス期の大学教育においては、自由七科が学問の基盤をなし、それと並ぶかたちで思弁の哲学、すなわちスコラ学も重要な位置を占めていた⁶。こうした基礎的学問の上に築かれていたのが、法学、医学、神学といった専門的学問であり、さらに神学こそは、あらゆる学問の頂点に位置すべきものであった。『学芸の不確実性』では、こうした知の体系を根底から覆すべく、自由七科から法学や医学を経て神学にいたるという具合に、学問批判が系統的に展開されており、伝統的な学問体系への対抗意識が鮮明に表れている。

第二の特徴は、とりわけ作品の導入部と結論部において顕著であるが、反理性の立場から打ち出される信仰至上主義である。アグリッパは人間の知を神の知と対立させようと、学問への盲信に対して警鐘を鳴らす。アグリッパによると、学問は神の知に匹敵しようとする点で、キリスト教信仰に反するものであり、これほど不信心を助長するものはない⁷。学者たちは人間に固有の知的手段、すなわち理性によって真理をつかむことができると自負しているが、人間の理性が作り上げたものは、いずれも欠陥だらけであり、虚無でしかない。「真実の領域はとても広いので、いかなる学問的思弁も、いかなる微細な感覚的判断も、いかなる巧妙な論理的議論も、いかなる明白な証拠も、いかなる演繹的な証明も、ようするに人間的理性によるいかなる考察も、真実を把握することはできない⁸」。このように、あらゆる学問的知識が虚偽であるならば、人間は神を抛りどころとして真理を求めるしかない。「唯一の真理は神であり、人間はみな嘘つきにすぎない […]。神のみが真理の源泉なのであり、正しい教えを探究する者は、この源泉を汲まなければならないのだ⁹」。つまりアグリッパによると、信仰と啓示のみが、人間を無知の悲惨さから救い出すための唯一の手段となるのだ。

学者たち、なかでも神学者たちへの挑発的な発言を含んだこの作品が、出版直後から物議を醸したのも驚くにはあたらない。『学芸の不確実性』は、1531年にパリ大学およびルーヴアン大学の神学者たちにより、異端思想を説

⁶ 中世・ルネサンス期の大学教育における学問体系やその特質については、エウジェニオ・ガレン『ルネサンスの教育』近藤恒一訳、知泉書館、2002年、33-60頁を参照。

⁷ Henri-Corneille Agrippa, *Déclamation sur l'incertitude, vanité et abus des sciences, traduite en François du Latin*, Genève, Jean Durand, 1582, chap. CI, p. 536.

⁸ *Ibid.*, chap. I, p. 9-10.

⁹ *Ibid.*, chap. C, p. 528.

いた不敬虔な書として告発される¹⁰。とりわけ問題になったのは、この作品に見られる反教権的な態度であり、たとえば聖職者たちの奢侈や教会における典礼、聖人崇拜や聖遺物崇拜、修道士たちの偽善的なふるまいに対する批判である¹¹。とはいえ、この作品は16世紀末までに21回も出版され、さらにはドイツ語訳、イタリア語訳、フランス語訳などが刊行されたことから¹²、ヨーロッパ各地で多くの人々に読まれたことが伺える。

アグリッパはフランスの作家たちにも数々の反響を及ぼした。ラブレーの『第三の書』（1546）には、コルネリウス・アグリッパの名前をもじったヘル・トリッパなる魔術師が登場する¹³。ただし、ラブレーが描いたこの人物は、さまざまな魔術に長けた学者というよりも滑稽な占い師であり、アグリッパの人間性や思想からはほど遠いものといえる。さらにアンドレ・テヴェは、『諸々の著名人に関する真の肖像および生涯』（1584）において、アグリッパの博識ぶりを認めながらも、「驚くべきは、あれほど才能にあふれた人物が、放言のかぎりを尽くし、称賛すべき立派な学問を非難すべき学問と同じように扱い、軽はずみに揶揄したことである¹⁴」と述べて、アグリッパの無責任な発言が学問の権威を傷つけたことを咎めている。同じような評価は、ジャック・タユローの『対話集』（1565）にも見られる。タユローは、アグリッパを「たんに世間の関心を引きつけて人々を感化するために、権威

¹⁰ Marc van der Poel, *op. cit.*, p. 32-33, p. 119-120. これらの告発に反論すべく、アグリッパは1533年に『弁明』（*Apologia*）および『告発』（*Querela*）と題された文書を發表し、カトリック教会に対する従順とみずからの思想的正当性を主張している。

¹¹ 聖職者たちの豪華な衣服や生活は第59章「祝祭について」および第61章「高位聖職者について」において、教会における形式的で空疎な典礼は第60章「典礼について」において、聖人崇拜や聖遺物崇拜は第57章「偶像について」において、修道士たちの道徳的腐敗は第62章「修道会の流派について」において、それぞれ批判されている。ただし、このような反教権的な態度は、アグリッパに固有のものでなく、1520年代のドイツ人文主義作家において頻繁に見られる特徴である（voir Charles Nauert, *op. cit.*, p. 165, n. 39）。

¹² Roland Crahay, *art. cit.*, p. 892.

¹³ 『第三の書』の第25章において、結婚すべきか否かと悩むパニユルジュは、ヘル・トリッパに相談する。ヘル・トリッパは、いろいろな占術を用いて、パニユルジュがコキユになると予言するが、自分自身がコキユであることには気づいていない。ちなみに、このコキユの逸話は、『学芸の不確実性』の第31章「判断占星術について」からの借用である。アグリッパはこの章で、占星術師はどんなことも天体の運行から知ることができると自慢するくせに、自分の身に起きることは何も知らない、とからかったうえで、トマス・モアの風刺詩を引用している。

¹⁴ André Thevet, *Les Vrais Pourtraits et vies des hommes illustres*, Paris, Veuve Kerver et Guillaume Chaudière, 1584, p. 544.

的な作家からの引用や、なにやら奇妙でおかしな論法を風刺に用いた¹⁵」だけの思想家としており、とりわけ彼の風刺がカトリック教会の教義に異議を唱える人々を生み出したという点で、「アグリッパはキリスト教徒にとっての真のペテン師にすぎなかった¹⁶」とこきおろしている。

以上の点から理解できるのは、16世紀後半のフランスにおいて、アグリッパの作品は、学問およびキリスト教の威信を脅かす危険な書として、否定的に評価されていたということである。とはいえ、これらの評価は、パリ大学およびルーヴアン大学の神学者たちによる告発を受け継いだものであり、アグリッパの作品を読んだうえでの評価であるとは言いがたい。実際のところアグリッパが標的としていたのは、学問それ自体でもキリスト教でもない。彼が批判したのは、学者たちや聖職者たちの権威主義的な態度であり、自分たちだけが真理を握っているとする彼らの思い上がりである。こうしたアグリッパの批判は、モンテーニュによって受容され、借用を通して『エッセー』の中に組み込まれ、新たな文脈のもとで生かされることになる。

理性と信仰

『エッセー』の全章のうちで、『学芸の不確実性』からの借用が最も多く見られるのは、第2巻12章の「レーモン・スボンの弁護」である。この章では、理性のみによって真理を把握することができると思える人々を反駁するために、さまざまな議論が展開されてゆく。モンテーニュは章の前半において、こうした理性主義者たちがキリスト教信仰に及ぼす危険性を指摘したうえで、彼らのうぬぼれた知的態度を激しく批判すべく、論戦の開始を告げる。

彼らは〔理性という〕純粋に人間的な武器でもって、われわれの宗教を自由に攻撃するための有利な立場を与えられたと思いこんでいる〔…〕。こうした熱狂ぶりを打ち倒すために私がとる手段、最も適切と思われる手段は、高慢さと人間の思い上がりを叩きつぶし、踏みにじってやることである。彼らに人間のはかなさ、空しさ、無意味さを思い知らせることである。彼らの手から理性というちっぽけな武器をもぎとることである。尊厳なる神の権威と威光の前に、彼らの頭を垂れさせ、平伏させることである。学問も知恵も、ひとり神のみに属するのだ¹⁷。

¹⁵ Jacques Tahureau, *Les Dialogues*, éd. Max Gauna, Paris-Genève, Droz, 1981, p. 201.

¹⁶ *Ibid.*, p. 203.

¹⁷ Montaigne, *Essais*, éd. Villey-Saulnier, Paris, PUF, 1965, p. 448 A.

この戦闘的な表現にはアグリッパからの影響が見られる。アグリッパは『学芸の不確実性』の序文で、学者たちが聖書に対する不信を招き、信仰をおとしめた事例をいくつも挙げている。そして、これらの害悪を駆逐するために、学者たちによって積み重ねられた迷妄を一掃することの必要性を説く。「これらの自信過剰な〔学問の〕巨匠たち、聖書の敵たちを攻撃し、彼らの城塞や砦を取り壊してやらねばならない。そして、人間の知性が〔…〕つねにさまよって真実から離れ、どれほど盲目な状態にあるかということを見せてやらねばならない¹⁸」。このようにアグリッパも、聖書の教えをおびやかすキリスト教の敵たち、とりわけ人間の知性を過信する学者たちと戦い、彼らの「城塞」や「砦」である学問や知識を打ち砕くことを宣言している。アグリッパもモンテーニュと同じように、学問的真理に対する宗教的真理の優位性を明らかにすることで、信仰の擁護を目指すのである。人間と神とのあいだに一線を画し、人間の限界性を示そうする点では、アグリッパもモンテーニュも共通している。

アグリッパによると、知識は災いのもとである。彼は学問の探究に心を傾ける人々に対して、次のように警告している。「人間にとって知識ほど有害な (pestilencieux) ものではないというのは確かだ。これこそが真の伝染病なのであり、全人類を一人も残さず墮落させたのである¹⁹」。同じくモンテーニュも、われこそが知識の所有者であるとうぬぼれることを、人間にとって致命的な病気としている。「人間を害する病気 (peste) は、自分は何のごとを知っていると思うことである²⁰」。こうした知識の高慢さをくじくために、モンテーニュはさまざまな学問における理論や学説を検証する。とりわけ「レーモン・スポンの弁護」において攻撃対象とされるのは、哲学者たちの学説である。たとえば、伝統的な哲学においては、アリストテレスの学説が権威として認められている。「スコラ学の神はアリストテレスである。彼の掟について議論することは、スパルタでリュクルゴスの掟について論じるのと同じように、不敬とされている²¹」。そのため哲学者たちは、アリストテレスの学説を鉄則として受け取り、これに疑義を呈することさえしない。彼らの議論はつねにアリストテレスを土台として組み立てられている。したがって哲学の伝統を突き崩すには、哲学者たちの学問的土台を揺さぶればよいのだ。

¹⁸ Agrippa, *op. cit.*, « Preface au lecteur », 5 v°.

¹⁹ *Ibid.*, chap. I, p. 9.

²⁰ Montaigne, *op. cit.*, p. 488 A.

²¹ *Ibid.*, p. 539 A.

モンテーニュは、アリストテレスの学説に対置させるかたちで、古代ギリシアの哲学者たちの見解を並べたてる。

プラトンのアイデア、エピクロスのアトムの原子、レウキッポスやデモクリトスの充満と空虚、タレスの水、アナクシマンドロスの無限、ディオゲネスの空気、ピュタゴラスの数と対称性 […]、エンペドクレスの不和と友愛、ヘラクレイトスの火など、人間の立派な理性は、その確信と洞察力によって、あらゆるものに手を出して、数えきれないほどの混沌とした意見や判断を生み出してきた。自然の原理をめぐるアリストテレスの学説を認めるのなら、なぜこれらの考えも、すすんで認めてはいけないのか、私にはその理由がわからない²²。

ここで挙げられている哲学者たちの見解は、アグリッパからの借用である。『学芸の不確実性』の第 50 章「自然の原理について」では、自然哲学におけるさまざまな見解が記されている。アグリッパによると、哲学者たちは古代からの問題でさえ、いまだに合意に達しておらず、「彼らのうちで誰が正しいことを言ったのかも知らないため、彼らが主張する対立的な意見は、いずれも説得力があり論破しがたい²³」。その証拠としてアグリッパは、自然の原理をめぐるタレスからアリストテレス学派までの諸々の学説を、章全体にわたって列挙している²⁴。そこでは、空気や水といった物的なものから抽象概念や神にいたるまで、あらゆるものが自然の原理とされているが、いずれの学説も優劣をつけられることなく、たがいに対立しあった状態で並べられている。

このように学者たちの諸説をいくつも並べるといふ論法は、古代懐疑主義の得意とする手法であるが、アグリッパの作品では随所に用いられている。古代懐疑主義、とりわけピュロン主義は、理性の無力さを露呈させ、あらゆる議論を判断保留へと導くために、学者たちの意見をたがいに拮抗させて相

²² *Ibid.*, p. 539-540 A.

²³ Agrippa, *op. cit.*, chap. L, p. 186.

²⁴ モンテーニュが借用した部分は以下の通りである。「神託によって最初の賢者とされたミレトスのタレスは、万物の起源は水であると主張した。彼の弟子で学派の継承者であるアナクシマンドロスは、無限を原理とした […]。ヒッパルコスとエフェソスのヘラクレイトスは、万物が火からできているとした […]。レウキッポスとディオドロスとデモクリトスは、万物は充満と空虚であると言ったが、自由人ディオゲネスは、神の理性をそなえた空気とした。サモスのピュタゴラスは万物の根源を数に置いていた […]。アクラガスのエンペドクレスは、万物は四大元素による友愛と不和であると主張したが、エピクロスは、万物は原子と空虚であるとした。プラトンとソクラテスは、万物は神であり、アイデアであり、実体であると言った」(Agrippa, *op. cit.*, p. 186-187)。

対化をはかる²⁵。同じようにアグリッパも、学者たちの意見の不一致を示すことで、彼らの学問がいかなる点においても真理に達していないことを証明しようとする。実際に『学芸の不確実性』では、自然哲学のあとに形而上学と道徳哲学の議論が取り上げられ、哲学者たちによる対立的な見解が延々と羅列されている。哲学者たちは、世界や宇宙について知らないばかりか、人間自身のことについても確実な真理を見いだしていないのだ。哲学者たちがたがいに理解しあおうとせず、不毛な議論をくり広げていることから、アグリッパは、彼らが知性において何ら動物と異なるところがない、とまで揶揄する。「哲学はあらゆることがらを論じるが、なにひとつ確実に決定的な議論に達することがない。したがって、哲学者たちを動物に分類すべきか、それとも人間に分類すべきか、私には判断できないほどだ²⁶」。

「レーモン・スポンの弁護」における主な哲学批判は、こうしたアグリッパの列挙法に依拠している。モンテーニュは、ピュロン主義に賛同しながらも、具体的な論証形式やその材料に関してはアグリッパに多くを負っているのだ²⁷。実際に「レーモン・スポンの弁護」では、先ほど引いた箇所（自然の原理をめぐる哲学者たちの見解）のあとにも、アグリッパの作品からの借用がくり返される。モンテーニュの哲学批判が目指すところは、ピュロン主義と同じように理性の弱さを示すことにある。「理性こそは哲学者たちにとって、あらゆる検証における試金石とされている。けれども、それはもちろん、虚偽と誤謬と弱点と欠陥にあふれた試金石である²⁸」。そうした理性が生み出す知識の矛盾を指摘するために、モンテーニュは『学芸の不確実性』から事例を借用する²⁹。

²⁵ 「懐疑主義の構成原理は、なにかんづく、あらゆる言論とそれと同等の言論が対立〔矛盾〕する、ということである。ここから出発してわれわれは、ドグマをもたない状態に立ちいたると思われるからである」（セクストス・エンペイリコス『ピュロン主義哲学の概要』第1巻第16章12、金山弥平・金山万里子訳、京都大学学術出版会、1998年、12頁）。

²⁶ Agrippa, *op. cit.*, chap. XLIX, p. 186.

²⁷ モンテーニュの懐疑主義、とりわけ『エッセー』におけるピュロン主義の受容については、主に以下を参照のこと。Frédric Brahami, *Le Scepticisme de Montaigne*, Paris, PUF, 1997; Marie-Luce Demonet et Alain Legros (dir.), *L'Écriture du scepticisme chez Montaigne*, Actes des journées d'étude (15-16 novembre 2001), Genève, Droz, 2004.

²⁸ Montaigne, *op. cit.*, p. 541 A.

²⁹ モンテーニュが借用した部分は以下の通りである。「テーバイのクラテスは、靈魂など存在しないと考え、肉体はご覧のように自然に動いているものだ、と主張した[…]。ウェアは、靈魂とは口から入り、肺で温められたのちに心臓で和らげられ、全身に広がる空気であると言った。ヒッピアスのように、靈魂は水からできたと言う人々がいれば、ヘシオドスやプロニピダスのように、土からできたと言う人々も

人間の理性は、クラテスとディカイアルコスには「靈魂はけっして存在するものではなく、肉体は自然の運動によってあのように動くのだ」と教えた。プラトンには「靈魂はみずから動く実体」と教え、タレスには「休息のない自然」と、アスクレピアデスには「諸感覚の運動」と、ヘシオドスとアナクシマン드로スには「土と水でできたもの」と、パルメニデスには「土と火でできたもの」と、エンペドクレスには「血でできたもの」と教えた […]。さらにヒポクラテスには「体内に広がる精気」と、ウァロには「口から入り、肺で温められ、心臓で適度に和らげられ、全身に広がる空気」と教えた […] ³⁰。

靈魂は人間をつかさどる生命原理であるが、哲学者たちはそうした基本的な概念についても、いまだに結論を出していない。彼らはみな理性という共通の知的手段を用いて推論しているはずなのに、これほどにも考えが相反しているのだ。こうした意見の不一致は、モンテーニュによると、靈魂のありかをめぐる議論についても見られる。

靈魂の所在についても、これに劣らないほどの異論や論争がある。ヒポクラテスとヘロフィロスは、靈魂を脳室に置いたが、デモクリトスとアリストテレスは、これを全身に置いた。エピクロスは胃に置いた。ストア派の人たちは、靈魂を心臓の周辺と内側に置いたが、エラシストラトスは、頭蓋の皮膜に付着しているとした […] ³¹。

哲学者たちが衝突しあい、自分たちの知的能力ではいかなる真実にも到達できないことから、モンテーニュは判断保留という懷疑主義的な立場にいたる。「こうして意見が多様で定まらないことから、哲学者たちは、われわれの手を取るようにして、それとなく解決不能という結論に導く³²」。哲学者たちは虚栄心から自分たちの無知を認めようとしないが、諸説が入り乱れて

おり、ミレトス市民のアナクシマン드로スとタレスは、後者の見解にいくらか賛同している […]。パルメニデスのように、靈魂は土と火からできたとする人々もいれば、エンペドクレスやキルキアスのように、土からできた精気だとする人々もいる。医者ヒポクラテスのように、全身に行き渡る微細な精気だとする人々もいれば、アスクレピアデスのように、諸感覚の運動や作用をとまなう肉体だとする人々もいる […]。プラトンは、靈魂とは知的能力をもたず、自ら動く実体だと言っている」(Agrippa, *op. cit.*, chap. LII, p. 190-191 et 193)。

³⁰ Montaigne, *op. cit.*, p. 542 A.

³¹ *Ibid.*, p. 543 A. この引用文も『学芸の不確実性』からの借用である。「ヒポクラテスとヘロフィロスは、靈魂を脳の空洞あるいは脳室に置いたが、デモクリトスは肉体全体に置いた。エラシストラトスは、靈魂が脳髄膜の周辺にあると言った […]。エピクロスは胸全体に置いた […]。ストア派とクリシッポスは、心臓の周辺および、心臓を取り巻く精神の内部に置いた」(Agrippa, *op. cit.*, chap. LII, p. 194)。

³² Montaigne, *op. cit.*, p. 543 A.

いる状態からして、彼らの生み出した知識が空しいことは明らかであろう。以上のように、「レーモン・スポンの弁護」におけるアグリッパからの借用は、理性の無力さを立証するための論拠として用いられ、キリスト教信仰の擁護のための布石の役目をなしているのである。

医学と経験

『学芸の不確実性』からの影響は、『エッセイ』第2巻37章の「子供が父親と似ることについて」にも見られる。モンテーニュはこの章において、自分の持病である腎臓結石のこと、病苦に慣れ親しむための方法、彼の先祖や家族のこと、医学および医者をめぐる彼自身の意見を語っている。自分の先祖が医者や薬の助けを借りずに長寿をまっとうしたことから、モンテーニュも医学に頼ることなく、みずからの経験を手がかりに苦痛を和らげようとする。「医学は事例と経験から成り立っているが、私の考え方もそうなのだ。このことは、きわめて明瞭で、きわめて有益な経験ではないだろうか³³」。そして章の途中から後半にいたるまで、医学や医者に対するモンテーニュの批判が展開されてゆく。

モンテーニュがこの章で主に批判するのは、医学の有用性である。彼によると、医術にどれほどの効果があるかは疑わしい。たとえ医術を知らなくても長生きした人々の例は、歴史上にいくつも存在する。

どんな民族も、数世紀のあいだは医術なしに暮らしてきた。この最初の数世紀こそは、最も幸福な最良の時期であった。それに現代でも、世界の十分の一が医術を用いずに暮らしている。無数の民族が医術を知らないのに、われわれよりもはるかに健康で長生きしている。われわれのあいだでも、庶民は医術なしに幸福に暮らしている³⁴。

これらの人々は、自分たちの経験を通して、ある食べ物や飲み物が病気に役立つことを知っている。「プルタルコスによると、大カトーはどうやらウサギの肉を用いて家族の健康を維持したらしい[……。わが地元の村人たちも、どんな病気でも、最も強いワインにサフランと香辛料をたっぷり加えた飲み

³³ *Ibid.*, p. 764 A. モンテーニュの医学観については、J・スタロバンスキー『モンテーニュは動く』早水洋太郎訳、みすず書房、1993年、232-299頁を参照。

³⁴ *Ibid.*, p. 766-767 A.

物しか使わない³⁵」。それに対して医術は、複雑な施術や珍しい薬剤などを使い、患者の生活習慣や環境に逆らってまでも病気を治そうとする。つまりモンテーニュによると、医術とは自然に反した技術であり、その効果は明らかではない以上、患者の思いこみだけにかかっているのだ。

医学の有用性を信じ込ませるために、医者にはあらゆる理屈をつけて治療の効果を喧伝しようとする。そうした医者の欺瞞についても、モンテーニュは問題視している。

自分の指示に従った患者に、良い結果が生じたら、それはすべて医学のおかげということになる。この私を治してくれた諸々の要因や、医者への助けを求めない多くの人々を治してくれる諸々の要因を、医者たちは奪いとして自分のものにする。そして、悪い結果が生じたら、彼らは自分の責任をいっさい認めず、くだらない理由をいろいろと挙げて、患者に罪をなすりつける […] ³⁶。

医者たちは患者の病状が少しでも回復すれば、それを自分の手柄にするが、逆に病状が悪化した場合には、それを患者のせいにする。ようするに、彼らにとって大事なものは、患者の健康ではなく、自分たちの評判なのだ。このことから、医者がいかさま師と何ら変わらないという点が見てとれる。

こうした医学批判は、『学芸の不確実性』の第 83 章「医術の実践について」ですでに述べられている。アグリッパはこの章において、医者たちの虚栄心や悪徳ぶり、医学の虚妄を暴き出している。彼によると、医者たちは「あらゆる人のうちで最も悪意に満ちており、たがいに仲が悪く、とても妬み深くて嘘つきの連中³⁷」である。彼らは仰々しい身なりや難解な専門用語によって、権威をひけらかそうとする。それに医者たちは名誉欲を満たすことに必死である。彼らは、治療が成功した場合には「重病人を生き返らせたとか、その患者の生命は自分たちのおかげだとか、自分たちが患者を死の手から奪い返したとか、あちこちで吹聴する」くせに、逆に患者を死なせてしまった場合には「しばしば自然の欠陥や病気の悪さのせいにしたたり、患者の不服従を非難したりする³⁸」。さらにアグリッパによると、医者たちは金銭欲のかたまりでもあり、「病人が金持ちや有力者であれば、病気の治療をできるだ

³⁵ *Ibid.*, p. 767 A.

³⁶ *Ibid.*, p. 768 A.

³⁷ Agrippa, *op. cit.*, chap. LXXXIII, p. 425.

³⁸ *Ibid.*, p. 426 et 427.

け長引かせて、多くのお金をとろうとする³⁹⁾」ため、かえって患者の生命を危険にさらすことになる。

医术の効果が確かでないことから、アグリッパはむしろ医者にかからずに生きることを読者に勧める。実際に、「医者なしで暮らす民族は、かつていくつも存在したし、いまだに現在でもいるが、そうした場所では、老人たちは寿命の限界を超えて、100歳になっても元気で過ごしている⁴⁰⁾」。しかも、どれほど学識に優れた医者であれ、生活の知恵を自然から学ぶ農民には打ち勝つことができない。「ある村の老婆は、庭でとれた天然の薬草だけで、より安全に病人を癒すが、それに対して医者は、気まぐれで疑わしい憶測によって調合された、ひどく貴重な薬剤を用いても、癒すことができない⁴¹⁾」というありさまだ。つまり医学とは、アグリッパによれば、あやふやな憶測にもとづいた空論であり、科学という名のまやかしにすぎないのである。

ちなみに「子供が父親と似ることについて」では、アグリッパからの借用に差し挟まれるかたちで、モンテーニュによる病気とのつきあい方が記されている。つまりこの章では、医学という「一般的な知」に対抗すべきものとして、モンテーニュ自身の「個人的な知」が表明されるのである。彼は個人的経験を通してさまざまな治療法を学ぶ。「私は経験から、わさび大根が腸を膨らませ、センナの葉が腹をくらすことを知っている。そうした経験ならば、私はいくつも知っている。たとえば、羊肉が栄養になり、ワインが身体を温めるというふうに⁴²⁾」。医学は患者個人の体質や病状を総括することで、普遍的な治療法を確立しようとするが、それに対してモンテーニュは、みずからの経験を一般化させることなく、もっぱら自分だけに有効な治療法を探究する。医学の根拠が不確かである以上、モンテーニュは学問の助けを退ける。彼はむしろ自然の歩みに従って生き、わが身を死に委ねることを好むのだ。「われわれは従おう、神の名において従おう。自然の秩序は、従う者を導いてくれるし、従わない者については、彼らの激痛も医薬もいっしょに引きずっていく⁴³⁾」。

こうした反医学的な立場に立脚したモンテーニュの死生観は、『エッセー』第3巻13章の「経験について」において、より本格的に論じられる。モンテーニュはこの章でも、学問が導き出す一般的法則と彼自身による個人的経験

³⁹⁾ *Ibid.*, p. 422.

⁴⁰⁾ *Ibid.*, p. 434.

⁴¹⁾ *Ibid.*, p. 438.

⁴²⁾ Montaigne, *op. cit.*, p. 765-766 B.

⁴³⁾ *Ibid.*, p. 768 C.

則を対置させようとして、自分自身について学ぶこと以上に有益な学問はないと説く。そして彼自身の闘病体験について語り、医学に頼らずに自然を導き手として受け入れて生きることを主張する。したがって「経験について」の章で語られるモンテーニュの人生哲学は、すでに彼が「子供が父親と似ることについて」の章で記した彼の医学観や死生観をいっそう発展させたものであるといえよう。このように、モンテーニュの死生観は医学に対する反発とともに形成されたのであり、とりわけアグリッパの医学批判は、モンテーニュの死生観の萌芽において重要な役割を担っているのである。

デクラマティオからエッセイへ

ところで、『学芸の不確実性』からの借用は、哲学や医学に関する話題だけにとどまらない。とりわけ留意すべきは、この作品がたんなる学問批判の書であるだけでなく、ラテン語の書名に含まれた「演説」(declamatio)という語が示すように、デクラマティオとよばれる文学形式に属する作品でもあるという点である。

デクラマティオは、そもそも修辞学教育における模擬弁論の一種にすぎなかったが、ローマ帝政期において流行したのちに、修辞学上の演習としての枠組みを超え、文学ジャンルや演劇的娯楽のひとつになった⁴⁴。デクラマティオは、ある主題に対する弁護もしくは批判というかたちをとりながらも、歴史や文学や修辞学に関する多様で豊富な知識を披露し、ときおり時事的な風刺や脱線を織り交ぜながら、読者や聴衆を魅了させることを特徴とする。ちなみに、ルネサンス期に書かれたデクラマティオの作品として、最も有名なのはエラスムスの『痴愚神礼讃』であるが、この作品でも、神の愚かさを真の知恵として讃えるべく、国王や聖職者から、学者や民衆にいたるまで、あらゆる人間の知が愚かなものとして嘲笑される⁴⁵。

アグリッパも『学芸の不確実性』において、数多くの作家(神学者、哲学者、歴史家、詩人など)の言葉を引きながら、人間の文化的・社会的営みの

⁴⁴ 古代ギリシア・ローマにおけるデクラマティオの誕生とその変遷については、Laurent Pernot, *La Rhétorique dans l'Antiquité*, Paris, Librairie générale française, coll. « Le Livre de Poche », 2000, p. 200-207 を、白銀時代におけるデクラマティオの定義については、クインティリアヌス『弁論家の教育1』第1巻第10章、森谷宇一・戸高和弘ほか訳、京都大学学術出版会、2005年、174-177頁を参照。

⁴⁵ デクラマティオとしての『痴愚神礼讃』については、Jacques Chomarat, *Grammaire et rhétorique chez Érasme*, t. II, Paris, Les Belles Lettres, 1981, p. 970-999 を参照。

いっさいを空しいものとして風刺している。この作品では、骰子遊び（第14章）や音楽（第17章）、大道芸（第20章）や売春（第63章）、宮廷人の浪費ぶり（第69章）や国王たちの戦争（第79章）など、さまざまな行為や活動が俎上に載せられ、人間世界の空しさをめぐる壮大な一大絵巻がくり広げられる。こうした百科事典的な作品が『エッセー』の題材に影響を与えたとしても、驚くにはあたらない。というのもモンテーニュは、「高尚で論じつくされた話題」だけでなく、「空虚で価値のない話題」についても論じることを目指すからである⁴⁶。

実際に、『学芸の不確実性』と『エッセー』のあいだには、話題や著者の見解に関して注目すべき類似点があくつも見られる、たとえば『学芸の不確実性』の第79章「戦術について」では、戦争における計略や戦術が論じられる。アグリッパによると、戦術とは戦争の大規模化とともに生じた技術であり、人間を無慈悲で残酷な人物にする危険な手段である。しかも戦術は、実際の戦争には何の役に立たない。「戦争においては規律など存在しないし、さまざまな事件が不確かであるからして、戦争の法則や作法、計略が何の役に立つのだろうか。それに勝利を左右するのは、技術ではなく、人為を超えた力なのだ。この力は、人間の予想も企ても行為も、すべて無駄なものにする⁴⁷」。このようにアグリッパは戦術を、人道的な立場からだけでなく、人間の知恵の空しさという観点からも批判している。同じ話題は『エッセー』第1巻47章の「われわれの判断の不確かなことについて」にも見られる。この章でモンテーニュは、古今の戦争の例に照らし合わせて、つねに同じ戦術が功を奏するとはかぎらず、多くの戦争において偶然や運命が支配していることを結論づける。「とりわけ戦争において、さまざまな事件や結果は、ほとんどが運命に左右されるのであり、そうした運命はわれわれの推論や知恵の通りにはならない⁴⁸」。戦争の話題を手がかりにして偶然的なもの影響力を認め、人間の技術や理性の限界を説いている点では、アグリッパもモンテーニュも一致している。

モンテーニュにとって、司法は腐敗と不正に満ちた世界である。弁護士は「訴訟やめごと」のおかげで金銭を稼ぐが、彼らが請け負う訴訟のほとんどは「法律の解釈をめぐる争い」にすぎない⁴⁹。法律の言葉遣いは曖昧であ

⁴⁶ Montaigne, *op. cit.*, p. 301 A.

⁴⁷ Agrippa, *op. cit.*, chap. LXXXIX, p. 370.

⁴⁸ Montaigne, *op. cit.*, p. 286 A.

⁴⁹ *Ibid.*, p. 107 A et 527 A.

り、さまざまな解釈の余地があるため、「現代の弁護士や裁判官は、どんな訴訟事件でも、自分たちの好きなように按配する方法を見つける⁵⁰」のだ。このモンテーニュの発言に比べると、アグリッパの司法批判はいっそう辛辣である。『学芸の不確実性』の第93章「弁護士について」では、弁護士の任務とは「公平の原理に背いてまでも法律を盾に取り、立法者の意図に反したやり方で注釈や解釈を施すこと⁵¹」であり、なかでも優れた弁護士とは「より多くの人々を法廷に送り出し、彼らに勝訴を約束して訴訟の矢面に立たせる人物⁵²」である、と揶揄されている。さらに第96章の「宗教裁判について」では、魔女裁判に対する厳しい批判がなされる。この章でアグリッパは、「彼ら〔裁判官たち〕は、魔女や犯罪者として告発された村の哀れな女性たちにひどく残虐なことをする。彼らは、十分な法的根拠や手がかりもないのに、彼女たちを恐ろしい拷問にかけて、当人が決して考えたこともないような罪をしばしば自白させ、それを根拠に有罪を宣告しようとする⁵³」と述べて、魔女裁判の裁判官を断罪している。こうした不正な裁き方こそ、『エッセー』第3巻11章の「足なえについて」で告発されているものである。この章でモンテーニュも、魔女裁判における裁判官の判決が、被疑者たちの疑わしい自白にもとづいている点に疑義を呈している。魔女たちが人を殺したと自白しているのに、殺されたはずの人物が生きているという例が見られることから、モンテーニュは「こうした人々〔魔女たち〕の自白だけで満足してはならない⁵⁴」と警告したうえで、「結局のところ、自分の推量で一人の人間を生きながら火あぶりにするのは、自分の推量を過大に評価することだ⁵⁵」と述べる。魔女たちの自白に信用性がなく、裁判官の判決が独断でしかないことを指摘している点では、アグリッパもモンテーニュも共通している。

さらにモンテーニュとアグリッパは、動物に対する同情という点でも一致している。『学芸の不確実性』の第77章「狩猟について」では、狩猟が戦争に匹敵する残虐行為として非難される。「狩猟は残酷さという点で何かしら戦争と類似している。というのも、動物に向けて獰猛な狩猟を放ち、動物があちこちから流血して引き裂かれ、これ以上ないほどの苦痛によって死ぬの

⁵⁰ *Ibid.*, p. 582 A.

⁵¹ Agrippa, *op. cit.*, chap. XCIII, p. 482.

⁵² *Ibid.*

⁵³ *Ibid.*, chap. XCVI, p. 490.

⁵⁴ Montaigne, *op. cit.*, p. 1031 B.

⁵⁵ *Ibid.*, p. 1032 B.

を見て、人々は喜ぶからだ⁵⁶」。動物に対するこうした異常な快楽は、アグリッパによると、人間の原罪から生じた悪徳のひとつである。というのも旧約聖書「創世記」において、原罪を犯す以前の人間は、動物と協力しながら生きていたのであり、動物とのあいだに友好的な同等関係を築いていたからである⁵⁷。モンテーニュは同じ話題を『エッセー』第2巻11章の「残酷さについて」で扱っている。モンテーニュはこの章で、宗教戦争下におこなわれた猟奇的な殺害とともに、動物に対する暴力や狩猟行為を残酷さとして非難している。「私としては、罪のない動物が、われわれに何ら危害も加えないのに、防御の手段もないままに、追い回されたり殺されたりするのを見るだけでも、不快を覚えずにはいられない⁵⁸」。そして章の結末では、動物と人間との縁戚関係を示すべく、動物愛護にまつわる数々の逸話が好ましいものとして語られる。動物に関するアグリッパとモンテーニュのこうした見解は、たんなる偶然の類似ではない。というのも、「残酷さについて」に続く「レーモン・スポンの弁護」の前半部分において、モンテーニュは多くの動物譚を挙げながら、人間と動物とのあいだに同等性が存在することを証明し、アグリッパと同じように人間の思い上がりを退けようとするからである。

もちろん『学芸の不確実性』と『エッセー』には、ジャンルや執筆目的の点で大きな相違が存在する。とはいえ、豊富な話題を取り上げながら、特定の意見に傾倒することなく、ときに脱線を交えて自由に議論をくり広げていくスタイルは、二つの作品に見られる特徴である。このように、モンテーニュとアグリッパの作品には、話題の多様性や自由奔放な筆致において重要な類縁性が認められるのである。

おわりに

モンテーニュがセクストス・エンペイリコスのパユロン主義を踏襲しながらも、それをキリスト教思想と融和させつつ、独自のやり方で活用したことは、多くの研究者によって指摘されている。ただし、本論文において検証したように、モンテーニュの懐疑思想に議論的な材料をもたらしたのは、セクストス・エンペイリコスではなくアグリッパである。モンテーニュは『学芸の不確実性』で展開された議論を借用しつつ、理性が生み出す知識の多様

⁵⁶ Agrippa, *op. cit.*, chap. LXXVII, p. 357.

⁵⁷ *Ibid.*, p. 361-362.

⁵⁸ Montaigne, *op. cit.*, p. 432 A.

性や矛盾性を指摘し、キリスト教信仰の擁護にいたる。同じように、『エセー』における医学観や死生観の展開において、アグリッパの作品が与えた影響も無視することはできない。このようにアグリッパの作品は、特定の思想をモンテーニュに植え付けなかったにしても、モンテーニュ独自の思想形成を支える重要な基盤をなしていたのである。

最後に、もうひとつ付言すべき点は、アグリッパとモンテーニュの作品における「空しさ」というテーマの重要性である。『学芸の不確実性』では、その書名が示すように、人間のあらゆる営為や活動の空しさが論じられており、旧約聖書「コヘレトの言葉」にある「いっさいは空である」というメッセージが、作品全体を貫く通奏低音となっている。同じように『エセー』でも、第1巻51章の「言葉の空しさについて」や第1巻54章の「空しい小器用さについて」などの章題からもわかるように、空しさが主要なテーマをなしている。さらに第3巻9章の「空しさについて」では、老いや死をめぐる思想、旅行の体験、詩についての所感といった個人的な話題を通して、空しさをめぐる思索が記される。空しさはモンテーニュによると、あらゆる人間に内在する本質である。「もし他の人たちも、私のように自己を注意深く見つめるならば、やはり私と同じように、自分が空しさや愚かさで満ちていることに気づくであろう⁵⁹」。しかし、モンテーニュはアグリッパとは異なり、人間の空しさを断罪すべき不徳として捉えない。たとえいっさいが空しいものであっても、われわれは失望や諦念にとられるのではなく、空しい存在にふさわしい人間的な生き方を探索しなければならない。こうして『エセー』では、旅行の醍醐味や読書の楽しみ、さらには飲み食いの快樂さえもが、人生にとって有意義なものとされる。モンテーニュの人生哲学の根底にあるのは、こうした空しさの肯定から生じる人間的幸福の追求であるといえよう。

以上のように、モンテーニュはアグリッパの作品から多くの議論や題材を負いながらも、みずからの思索や体験に照らして焼き直すことにより、滋味豊かな人間的知恵を紡ぎ出したのである。

⁵⁹ *Ibid.*, p. 1000 B.

(資料) 『エッセー』における『学芸の不確実性』の借用箇所対照表

- ・借用として明らかな箇所だけを記載し、類似箇所は除外した。
- ・『エッセー』については、巻・章および頁の番号に続いて、該当箇所の開始行と終了行の番号を括弧内に記した。たとえば「II 12, p. 539-540 A (31-1)」という表記は、第2巻12章におけるp. 539の31行目からp. 540の1行目までのうち、[A]の部分に記された文章を指す。なお、『学芸の不確実性』については、章および頁の番号を記した。

『エッセー』	『学芸の不確実性』
II 11, p. 433 A (20-24) ⁶⁰	LII, p. 201-202
II 11, p. 434 A (9-10) ⁶¹	LII, p. 202
II 12, p. 487 A (11-13)	LIV, p. 253
II 12, p. 488 B (23-24) ⁶²	I, p. 4 / CL, p. 536
II 12, p. 497 A (18-20)	I, p. 8
II 12, p. 497 A (20-22)	I, p. 9
II 12, p. 498 A (15-18)	I, p. 9
II 12, p. 500 A (5-9)	CI, p. 539-540
II 12, p. 501 A (6-8)	I, p. 8-9
II 12, p. 501 A (16-17)	I, p. 9
II 12, p. 526 B (23-27)	LI, p. 188-189 / LII, p. 203
II 12, p. 527 A (7-8, 11-13)	III, p. 23
II 12, p. 536 A (5-10, 13-15)	XXX, p. 110-111
II 12, p. 537 A (24-26)	XXX, p. 127-128
II 12, p. 538 A (9-15)	XXX, p. 127-128
II 12, p. 539-540 A (31-1)	L, p. 186-187
II 12, p. 540 A (4-8)	L, p. 187-188
II 12, p. 540 A (24-35)	I, p. 11
II 12, p. 541 A (5-9)	I, p. 11
II 12, p. 542 A (3-19, 21-27)	LII, p. 191, 192 et 193
II 12, p. 543 A (1-6)	LII, p. 193

⁶⁰ オウイディウス『変身物語』第15巻158-159行（アグリッパからの間接引用）。

⁶¹ オウイディウス『変身物語』第15巻160-161行（アグリッパからの間接引用）。

⁶² 旧約聖書「創世記」第1章5節（アグリッパからの間接引用）。

『エッセー』	『学芸の不確実性』
II 12, p. 543 A (13-25)	LII, p. 194
II 12, p. 552 A (23-28)	LII, p. 195
II 12, p. 554 A (24-30)	LII, p. 201-202
II 12, p. 556 A (1-2)	LII, p. 198
II 12, p. 556-557 A (36-11)	LXXXII, p. 416-417
II 12, p. 560 A (16-20)	I, p. 10
II 12, p. 578-579 A (28-3)	LIV, p. 207-208
II 12, p. 584 A (12-15)	LXIII, p. 269
II 12, p. 584, note 13	LXIII, p. 270
II 16, p. 629-630 C (36-6)	LCI, p. 469-470, p. 471-472
II 23, p. 684 A (7-11)	LXXXVI, p. 450
II 37, p. 766 A (33-40)	LXXXIII, p. 434
II 37, p. 767 A (1-6)	LXXXIII, p. 440
II 37, p. 767 A (8-9)	LXXXIII, p. 435
II 37, p. 768 A (6-7)	LXXXIII, p. 434-435
II 37, p. 768 A (7-8)	LXXXIII, p. 433
II 37, p. 768 A (13-17)	LXXXIII, p. 426-427
II 37, p. 768 A (17-18)	LXXXIII, p. 439
II 37, p. 768 A (21-23)	LXXXIII, p. 423
II 37, p. 769 A (19-21)	LXXXIII, p. 442
II 37, p. 769 A (21-29)	LXXXIII, p. 425
II 37, p. 770 A (5-7)	LXXXIII, p. 419
II 37, p. 770 A (16-18)	LXXXIII, p. 422
II 37, p. 770 A (24-27)	LXXXIII, p. 425-426
II 37, p. 770 A (28-30)	LXXXIII, p. 425 et 437
II 37, p. 770 A (32-36)	LXXXIII, p. 432-433
II 37, p. 771 A (7-13)	LXXXII, p. 417
II 37, p. 771 A (13-17)	LXXXIII, p. 434
II 37, p. 772 A (5-7)	LXXXIII, p. 420 et 436
II 37, p. 772-773 A (36-2)	LXXXIII, p. 419
II 37, p. 773 A (14-19)	LXXXII, p. 414 / LXXXIII, p. 432
II 37, p. 773 A (26-27)	LXXXII, p. 418

『エセー』	『学芸の不確実性』
II 37, p. 774 A (2-4)	LXXXV, p. 448
II 37, p. 774 A (10-19)	LXXXIII, p. 438-439
II 37, p. 774 A (22-24)	LXXXIV, p. 443
II 37, p. 778 A (3-6) ⁶³	LXXXIII, p. 431
II 37, p. 780 A (15-18)	LXXXIII, p. 435
II 37, p. 780 A (19)	LXXXIII, p. 419-420
II 37, p. 780-781 A (36-1)	LXXXVIII, p. 452
II 37, p. 781 A (20-21)	LXXXIII, p. 437
II 37, p. 783 B (1-2)	LXXXIII, p. 434
III 5, p. 869 C (1-3)	LXIII, p. 270
III 13, p. 1069 B (35-37)	VII, p. 58

⁶³ アウソニウス 『エピグラム』 74 (アグリッパからの間接引用)。